

「超高齢社会における摂食嚥下障害に対するアプローチ」



九州歯科大学歯学部口腔保健学科多職種連携教育ユニット
教授 藤井 航

略 歴

【略歴】

1998年3月 愛知学院大学歯学部歯学科卒業
2004年3月 藤田保健衛生大学大学院修了 博士（医学）取得
2004年4月 藤田保健衛生大学医学部歯科口腔外科助手
2007年4月 藤田保健衛生大学歯科口腔外科助教七栗サナトリウム歯科勤務
2013年1月 藤田保健衛生大学歯科講師
2013年8月 藤田保健衛生大学七栗サナトリウム歯科講師
2015年4月 九州歯科大学歯学部歯学科老年障害者歯科学分野准教授
2018年1月 九州歯科大学歯学部口腔保健学科地域・多職種連携教育ユニット教授
2019年4月 ～現職

私たちの生活において「口から食べる」ということは、エネルギーを得ることだけではなく、人生の大きな楽しみの1つであることは言うまでもありません。しかし、脳卒中後遺症などの何らかの疾患により「飲むこと」や「食べること」ができなくなる「摂食嚥下障害」は増加しており、それに伴い肺炎で亡くなる高齢者も増加しています。また、病院や施設などだけではなく、在宅で療養している「摂食嚥下障害」の患者数も増加しています。

その患者数の増加に加えて、近年の摂食嚥下リハビリテーションの急速な発展と共に、歯科医院内や訪問先の病院・施設・在宅などで内視鏡下嚥下機能検査（VE）を施行し、歯科医師、歯科衛生士が摂食嚥下リハビリテーションを行うケースが増加すると考えます。また、医科歯科連携により、病院などの専門施設にVEや嚥下造影検査（VF）などの精密検査を依頼し、実際の訓練や対応などは歯科訪問診療などにおいて行うケースも同様に増加すると考えます。このように、摂食嚥下障害患者に対する摂食嚥下リハビリテーションをすすめるために、多職種連携は重要であり、歯科医師、歯科衛生士など歯科医療者の参画は必須です。

また、2018年4月の診療報酬改定から「口腔機能低下症」が追加されています。これは、オーラルフレイルを放置しておくと、口腔機能低下症となり、やがて咀嚼機能不全や摂食嚥下障害をきたして、全身的な健康を損なうこと、いわゆる要介護状態へ進行することを示しています。早期から口腔機能の低下を適切に診断、対応することによって、全身の機能低下（フレイル）を予防することが可能となります。

本講演では、摂食嚥下の基礎や評価方法、摂食嚥下リハビリテーションの実際などについて本学の取り組みも含め、動画を交えて解説します。本講演が、皆様の日常臨床の一助となれば幸いです。